泉鏡花文学における柳田民俗学の受容

安部亜由美

はじめに

日本民俗学の泰斗・柳田国男は、『故郷七十年』（昭和34・11、のじぎく文庫）で、泉鏡花は「生涯懇意にした友人の一人であつた」と回想している。

分野は異なるが、ともに民俗の世界への深い理解を基盤として、卓越した仕事を成し遂げた柳田国男と泉鏡花は、互いの仕事を高く評価し合っていた。早くから「鏡花の小説の淵源する所」(一)が口碑伝説であると看破し、「泉君贔屓」（田山花袋『東京の三十年』大正6・6、博文館）と呼ばれるほど鏡花文学を愛好していた柳田は、民俗学の第一人者として声望を得た後も鏡花への最大級の讃辞を惜しまなかった。周知のように柳田は田山花袋をはじめとして広く文学者と交友があったが、「這箇鏡花観」（「新小説」大正14・5）ほどの熱烈なオマージュを捧げた作家は鏡花の他にいない。

他方、鏡花も『膝栗毛』や『雨月物語』とともに、柳田の著書を愛読した（小村雪岱「泉鏡花先生と唐李長吉」昭和15・5、初版『鏡花全集』月報、岩波書店）。鏡花が柳田の『遠野物語』（明治43・6、聚精堂）を賛嘆して「遠野の奇聞」（「新小説」明治43・9、11）を著し、昭和期には柳田民俗学の影響の色濃い「山海評判記」（「時事新報」昭和4・7・2～11・26）や「貝の穴に河童の居る事」（「古東多万」昭和6・9）を発表したことはよく知られている。また、大正期の作品についても、須田千里氏が「鏡花文学における前近代的素材（下）」(二)の中で、柳田の影響を具体的に指摘している。

しかし、鏡花がいつ頃から柳田民俗学に関心を持ち、作品に反映させてゆくのか、時期によって受容のあり方に変遷があるのか、という点を含め、柳田民俗学受容の全体像

は未だ明らかではない。そこで本稿では、鏡花作品における柳田の痕跡――すなわち、柳田への言及や柳田の著作からの受容を具体的に検証することによって、この問題に取り組んでゆきたい。

一　『遠野物語』と「遠野の奇聞」

『故郷七十年』に拠れば、柳田国男と泉鏡花は吉田賢龍を通じて東京帝大の寄宿舎で初めて対面し、「暇さへあれば小石川の家を訪ねて行」く間柄になったという。小林輝冶氏の推定によれば、明治三十一年頃のことである[三]。当時の交友を反映して、鏡花は「錦帯記」（明治32・2、春陽堂）[四]や「湯島詣」（明治32・11、春陽堂）[五]、「道中一枚絵その一」（「文芸倶楽部」明治37・1）[六]に柳田をモデルとした人物を登場させている。ただし、これらの作品で柳田は「帝大生」「少紳士」として描かれており、鏡花が柳田の詩や初期の著作をどう評価していたかを窺い知ることはできない。

鏡花が柳田の著作に言及した最初の文章は、冒頭でも触れた「遠野の奇聞」である。『遠野物語』に対する島崎藤村の「『遠野物語』の著者を民族心理の研究者の霊異の採集者としてよりも、観察の豊富な旅人として見たい」（『遠野物語』、「中学世界」明治43・7）や、田山花袋の「道楽に過ぎたやうにも思はれる」（「インキ壺」、「文章世界」明治43・7）という評と比べると、「再読三読、尚ほ飽くことを知らず」「近来の快心事、類少なき奇観なり」という鏡花の称賛は際立っている。「お化け」好きの鏡花が、天狗や山男を活写した『遠野物語』を愛読したことは想像に難くない。殊に当時文壇を圧倒していた自然主義の潮流に、辛うじて談話という形で反発を示していた鏡花にとって、かねてより花袋らの作品に批判的[七]であった柳田が時流に背いて『遠野物語』を発表したことは、「頼もしい援軍」[八]「自らのお化けへの志向を肯定された」[九]と感じられたであろう。その歓喜が「遠野の奇聞」の熱烈な讃辞に繋がったという諸家の指摘も首肯できる。

しかし、こうした心理的な影響にとどまらず、『遠野物語』が実際に鏡花の小説に影響を与えたという見解には疑問がある。笠原伸夫氏は「これ（引用者注・『遠野物語』）を契機として鏡花の世界に潜在していた妖怪がはっきりとした姿をあらわすことになる」[一〇]として、「夜叉ケ池」（「演芸倶楽部」大正2・3）や「天守物語」（「新小説」大正6・9）をその成果と見なしている。しかし、管見の限りでは、明治末から大正初年にかけての作品に『遠野物語』からの具体的な摂取を看取できない。また『遠野物語』以

前にも「草迷宮」（明治41・1、春陽堂）の如く妖怪の暗躍する作品が発表されていることを考えれば、同書の影響による作風の変化も認め難い。

『遠野物語』は鏡花に強い印象を与えたが、すぐにその創作に影響を及ぼしたわけではなかった。後述するように、鏡花が柳田民俗学を受容し始めるのは大正以降であり、『遠野物語』は鏡花が柳田の著作に親しむ素地をつくったと見なすべきであろう。次章では、『遠野物語』を愛読した鏡花が、その後、いつ頃から柳田民俗学を受容し始めるのか、更に検証を進めてゆく。

二　「郷土研究」

「遠野の奇聞」以後、鏡花が柳田に言及した最も早い例は、「みなわ集の事など」（「新小説」大正11・8）の次の個所である。

愚問と言へば――お話は少々違ひますが、柳田国男氏は典範とすべき紳士で、そして学者です。古今にわたつた深い趣味の中の一つとして、山男、山女の生活に精しいのです。同氏が主幹だつた、郷土研究に山人外伝志料（ママ）と言ふのがあつて、明細に研究をされて居ますが、一口に言へば、いや早合点で申せば、山男はつまり山奥に取残された人種だと言ふ事に成るのです。山男は分りました。其処で山姫は何でせうかと……いつか会つた時、霧、霞の振袖に、戸隠升麻、白根葵の裾模様を、意気込んで聞いたものです。余り奇問に、しばらく考へて居なすつたつけ。それはあなた、山男の娘ですよ。端的明快ぢやありませんか。此方に予備知識がないと、言ふことがとんまで、間抜で、愚問以上の奇聞になります。――お恥かしいね。

傍線を付した「郷土研究」とは、大正二年三月に柳田が神話学者の高木俊雄とともに創刊した、日本で最初の民俗学の専門誌である。高木は創刊後わずか一年で同誌を去り、以後、大正六年三月の休刊まで柳田がほぼ独力で編集を担当した。鏡花が引用文中で言及するのは、柳田の「山人外伝資料（山男山女山丈山姥山童山姫の話）」（「郷土研究」大正2・3、4、8、9、大正6・2）である。この論考は副題の通り、山男や山女（山人と総称する）についての文献や談話を収集したものであり、波線部で鏡花が要約するように、柳田は山人＝先住民説を主張していた。『遠野物語』で山男の話を愛読した鏡花が、その発展的論考である「山人外伝資料」へと読み進めていったのは、自然な流れであると言えよう。

この「郷土研究」について、鏡花は「文壇思ひ出話」を

テーマとして行われた「新潮合評会」第二十三回（「新潮」大正14・4）でも言及している。

「軽子（かるこ）」といふ意味、あれは担ふといふ意味ですよ。カルウ、ニナフださうです。牛込の軽子坂とか碓氷の軽井沢のやうにですね、柳田さんの『郷土研究』で覚えたんです。

右は座談会の席上で、二葉亭四迷の『カルコ集』（明治41・1、春陽堂）が話題となった際の発言である。この発言は、柳田の地名研究の代表的論考「田代と軽井沢」（「郷土研究」大正4・2、のち『地名の研究』昭和11・1、古今書院、収録）を踏まえている。こうした地名考証を座談会で披露するほど、「郷土研究」から得た知識が鏡花に定着していたことが分かる。

では、「郷土研究」は鏡花作品にどの程度影響を及ぼしているのか。先行研究を踏まえつつ、具体的に検証してゆく。まず、田中励儀氏は、「峰茶屋心中」（「新小説」大正6・4）の「龍燈の伝説でもありさうな老樹」という表現が、柳田の龍燈松伝説を扱った「柱松考」（大正4・3、のち『神樹篇』昭和28・3、実業之友社、収録）、「柱祭と子供」（大正4・5、同上）、「龍燈松伝説」（大正4・6、同上）等に触発されたと指摘する（二）。しかし、田中氏も断るように、龍燈松伝説自体はよく知られており、右の表現だけで柳田の影響と断定するのは疑問が残る。

前掲注（二）須田論文は、「龍胆と撫子」（「良婦之友」大正11・1～6、「女性」大正11・8～12・9）および「隣の糸」（「女性」大正15・4）に見える「呼名の怪」が、柳田「呼名の怪」（大正5・1）に拠ることを指摘する。柳田「呼名の怪」は、桜井秀「俗信雑記（一）呼名の霊」（大正2・5）を踏まえた記事であり、鏡花は「俗信雑記」も併せて参照している。「龍胆と撫子」の「呼ばれたものは、恍惚と迷妄して、或は其のまゝに行方を失ひ、甚しきは生命を取られる」（屏風の絵）は、桜井の引用する一条兼香の日記「去月世上申沙汰、夜々無誰人令老若共呼、令呼与其人横死又不知行方」を踏まえた表現である。

同じく「龍胆と撫子」の「寺と言ふほどでもない、先づ庵ぢやが、こゝに毛坊主の非事理（ひじり）、年をとつた、優婆塞が一人住んで居ました」（紺紙蝶影）も、柳田「毛坊主考」（大正3・3～4・2）を踏まえていよう。

また、柳田の「巫女考」（「郷土研究」大正2・3～3・2）は「山海評判記」に影響を与えた論考としてよく知られているが、その影響は「蝶々の目」（「国本」大正10・3）の次の個所にも看取できる。

小母ちやんの背の笈の中に、何事もなく納つて通るが、湯から帰りがけに、此処まで来ると……（湯ざめをし

ないやうに）――半纏の笈摺がづゝんと重く成る。
――諸国遍歴の神巫だと、此処へ笈を下して、菖蒲塚を築くか、小町の柳を植ゑようと言ふ段取である。

柳田は「箱石と笈の塚（巫女考の八）」、「頼政の墓（巫女考の九）」で、漂泊の巫女が御神体を収めた笈を下ろし、土着化したという口碑が、時代が下るにつれ、小野小町や菖蒲御前など歴史上有名な女性の伝説へと変化した、という説を述べており、「蝶々の目」の記述はこの説を踏まえたものと考えられる。なお、「蝶々の目」以前にも、例えば「星の歌舞伎」（「女の世界」大正4・5～12）のように、〈巫女〉が重要な役割を果たす作品はあるが、「巫女考」の影響を看取できない。これをもって、大正四年の時点で「郷土研究」を読んでいないと断定するのは早計であるが、情況証拠の一つとして指摘しておきたい。

続いて、「由縁の女」（「婦人画報」大正8・1・1～10・2・1）には、本章冒頭で触れた「山人外伝資料」の影響を推定できる個所がある。同作には、麻野川上流の白菊谷から市街に薪と炭を売りに来る山の民・「山丈」が登場する。この「山丈」という呼び名は、柳田が山人の呼称の一つとして挙げる「山丈」と類似するが、既に笠原伸夫氏が指摘する通り(二二)、本作の「山丈」は柳田のいう山人とは相違する。『金沢市史・資料編14民俗』（平成13・3、金沢市史編さん委員会編）第二章第三節「山間地のなりわい」に拠れば、金沢周辺の山間地域は戦前まで木炭の産地であり、「雪のない季節は一度に六俵を背負い」「積雪期には竹を割ってソリを作り八～十俵をつけて」山から木炭を運搬したという。ただし、「山丈」という呼称については、『綜合日本民俗語彙』第四巻（昭和31・3、柳田国男監修、民俗学研究所編、平凡社）に「ヤマサ　樵夫をいう。奄美群島の喜界島の昔話にみえている」とあるが、金沢周辺でこの呼称が使われていたか否かは現時点では未確認である。よって、「山丈」を柳田の山人研究の摂取とすることは差し控えなければならないが、本作で「山丈」の一人・甚次郎が、繰り返し「山猿」と称されていることは注意を要する。「山猿」も柳田の挙げる山人の呼称の一つであり、甚次郎の「もそりと立ち、手をだらりと下げ、半面熊のやうな毛の中に、だらしなく、あんぐりと口を開けて、どろんと濁つた、黄色い目」（二十九）という風貌は、柳田の山人研究で描き出された山人像に類似している。

さらに「郷土研究」の影響は、大正期のみならず、昭和期の作品にも及んでいる。「貝の穴に河童が居る事」には、「ひよう〳〵」と飛ぶ河童が登場するが、これは尾花生（加藤雄吉）「河童の話」（大正3・5）の「鹿児島では春の彼岸の頃から夜分に限つて――殊に多くは雨などのそば降

る夜――ヒヨウ〳〵と云ふ声が繁く続いて、空の低い処を南から北へ行くのを聞く。（中略）土地の者は之を河童の声だと信じ、河童が水から上つて山に登るのだと言つて居る」という記述を参照したものである。

以上の検証により、鏡花が「郷土研究」を読み始めた時期が推定できる。「郷土研究」は大正二年三月から六年三月まで刊行されたが、管見の限りでは、大正六年三月以前の影響例を看取できない。従って、鏡花が刊行時に逐次読んでいた可能性は低い。「郷土研究」掲載論考からの影響が見え始めるのは、大正十年前後からである。

この点に関連して注目すべきは、大正十年前後の作品に『遠野物語』の影響を看取できることである。既に前掲注（二）須田論文が「毘首羯摩」（「国粋」大正10・1～10）への影響を、田中励儀氏が[一三]「龍胆と撫子」への影響を、指摘している。なお、付言すれば、「龍胆と撫子」の「一体、土地々々の宮社に舞ふ獅子は、其のはじめは鹿踊である。いまの獅子は、いつしか角のなく成つた鹿の頭ださうである」（祭の獅子）も『遠野物語』序文を踏まえている。

明治四十三年の刊行から十年も経ったこの時期に、初めて『遠野物語』の影響が現れることは看過できない。おそらく鏡花は、大正十年前後に「郷土研究」を入手し、柳田民俗学に触れたことが契機となって、改めて『遠野物語』を素材として見直し、作品に利用したのではないか[一四]。現時点では「郷土研究」入手の経緯までは明らかでないが、鏡花が大正十年前後に柳田民俗学を受容し始めたことは、以上よりほぼ確実であると言えよう。

三　「龍胆と撫子」

前章で検証した大正期の作品の中でも、「龍胆と撫子」は特に柳田民俗学の影響が色濃い。以下では「龍胆と撫子」の検証を通して、大正期における柳田民俗学受容のあり方を確認しておきたい。

前章では、本作中に柳田の著作からの影響が、先学の指摘を含め、四例認められることを述べた。その他、本作の主人公・雛吉と三葉子につきまとう「山窩」の集団についても、森田健治氏が柳田との関連を示唆している[一五]。柳田は明治四十年代よりサンカの問題に関心を持ち、「「イタカ」及び「サンカ」」（「人類学雑誌」明治44・9、11、明治45・2）、「所謂特殊部落ノ種類」（「国家学会雑誌」大正2・5）を著した。後者については、「郷土研究」（大正2・5）の雑報欄に「国家学会雑誌」掲載の旨が告知されており、鏡花がこれに導かれて読んだ可能性も一応考え

られる。だが、これらの掲載誌は硬派な学術雑誌であり、鏡花が読んだとは考えにくい。田山花袋が柳田の話を基にサンカを題材とする「帰国」（「新小説」大正5・8）を創作したこと（一六）を考慮すれば、鏡花もサンカについて柳田から直接聞き知ったと解する方が自然であろう。

ただし、大正期にはサンカに関する情報が新聞等で報道されており、本作における「山窩」造型のうち、犯罪性や暗号の使用については、柳田を介さなくとも描くことが可能であった。本作発表当時、サンカが一般に犯罪集団と認識されていたことは、森田氏が指摘する通りである。暗号や規律についても、鷹野弥三郎「山窩の生活」（「大阪朝日新聞」大正3・12・13、20）は、サンカが狼煙や暗号を使い、整然とした規律を持つと述べ、「河原の積石」（「読売新聞」大正10・7・11）もサンカの暗号を紹介する。また、変装した記者がサンカの集団に潜入するルポルタージュ記事「関東撲殺団探検」（「報知新聞」大正2・8・24～9・23（一七））にも同様の記述がある。

しかし、本作の「山窩」の造型には、新聞報道に見られない要素があり、これによって柳田の影響を想定できる。まず、本作では「特種の箕なほし、鋳掛屋、研屋など、所謂山窩の群」（蛇松の鱗五郎）とあるように、鋳掛屋と研屋を「山窩」に含めている。前掲「関東撲殺団探検」に「箕作りと山賊と他に附近を根拠としてゐた乞食の群と三つ合して山窩と称する特殊の一部落は出来上つたのである」とあり、前掲「山窩の生活」にも「最寄りから盗んで来た竹で、筌箒を作り箕を作る。或は箕の破損を直しに出廻るのもある」とあるように、箕直しはサンカの職業としてよく知られていたが、鋳掛屋・研屋を含める例は見あたらない。柳田の著作においても同様である。では、なぜ鏡花は鋳掛屋・研屋を「山窩」に含めたのか。研屋については不明だが、鋳掛屋については推測が可能である。前掲注（一四）須田論文が指摘するように、鏡花は柳田の炭焼長者譚についての考察を参考にして「唄立山心中一曲」に鋳掛屋を登場させており、その知識が「山窩」の造型に入り込んだ可能性が高い。

また、「山窩」が日一つの神を信仰するという設定も、同時代文献に見られない。本作を含め、大正・昭和期の鏡花作品に描かれる日一つの神が、柳田の「一日小僧」（「東京日日新聞」大正6・8・14～9・6、のち『一日小僧その他』昭和9・6、小山書店、収録）などの論考に由来することは、前掲注（二）須田論文に指摘がある。しかし、柳田は日一つの神とサンカの関係については、全く言及していない。

つまり、柳田がサンカとは別の問題で取り上げた〈鋳掛

屋〉〈日一つの神〉が、本作では元来の文脈から切り離されて「山窩」の造型に取り込まれている。このことは、鏡花の関心が柳田の所説そのものよりも、細部のイメージや表現にあることを示している。前章で紹介した『遠野物語』や「毛坊主考」からの摂取例も同様である。

柳田の言説から断片的なイメージ・表現のみを摂取する例は昭和期にも散見し、大正期に限らず、鏡花の民俗学受容に通底する特徴と言える。もっとも、昭和期に至ると、「山海評判記」や「貝の穴に河童の居る事」のように、民俗学に由来する素材を作品の中核に据える試みも見られるようになるが、本作は未だその段階にはない。本作における鏡花の民俗学受容は、柳田の著作に見える知識や表現を、興の赴くまま断片的に摂取する段階にとどまっている。鏡花が柳田民俗学を体系的に受容し、作品の統一的なテーマとするには、まだ時間を要したのである。

四　昭和期における民俗学受容

続いて、民俗学の受容が本格化する昭和期について検証を進めてゆきたい。

まず、鏡花が柳田に言及している例を挙げておこう。東京日日・大阪毎日新聞社が主催する「日本八景」選定企画の一環として執筆された紀行文「十和田湖」（「東京日日新聞」昭和2・10・1～9、「大阪毎日新聞」昭和2・10・13～22）に、次の記述がある。

三本木は、柳田国男さんの雑誌――（郷土研究）と、近くまた（郷土会記録）とに教へられた、伝説をさながら事実に殆ど奇蹟的の開墾地である。（中略）いま思へば、予て一本を用意して、前記（郷土会記録）載する処の新渡戸博士の三本木開墾の講話を朗読すれば可かった。土地に住んで、もう町の成立を忘れ、開墾当時の測量器具などの納めた、由緒ある稲荷の社さへ知らぬ人が多からうか、と思ふにつけても。――

「新渡戸博士の三本木開墾の講話」とは、新渡戸稲造が大正二年に郷土会で行った講演を指す。これは「三本木村興立の話」として「郷土研究」（大正2・7）に掲載され、のち柳田国男編『郷土会記録』（大正14・4、大岡山書店）に収録された。「開墾当時の測量器具などの納めた、由緒ある稲荷の社」は、新渡戸の講話に見える挿話である。

また、「木菟俗見」（「東京朝日新聞」昭和6・8・2～7）にも、次の記述がある。

こゝに当朝日新聞のお客分、郷土学の総本山、内々ばけものの監査取しまり、柳田さん直伝の手段がある。直伝が行きすぎならば、模倣がある。／土地の按摩に、

土地（ところ）の話を聞くのである。（中略）柳田さんは、旅籠のあんまに、加賀の金沢では天狗の話を聞くし、奥州飯野川の町で呼んだのは、期せずして、同氏が研究さるゝ、おかみん、いたこの亭主であつた。第一儼然として絽の紋付を着たあんまだといふ、天の授くるところである。

柳田が金沢で按摩から天狗の話を聞いたという挿話は、明治四十二年、北陸に旅行した折のものである。この時の日記に、金沢では「夜は按摩に附近の口碑などを多く語らしむる」とあり、「山男の家庭」（「郷土研究」大正4・3、のち『妖怪談義』昭和31・12、修道社、収録）にも「加賀の金沢の按摩曰く、此土地も大きに開けました。十年ほど前迄は冬の夜更に町を歩いて、迷子の〳〵誰それと呼ぶ声と、之に伴ふ淋しい鉦の声を聞かぬ晩はありませなんだ云々。」とある。鏡花はこの「山男の家庭」の一節を、「ピストルの使ひ方」（「文芸倶楽部」昭和2・9～3・2）でも友人の話として利用している。

柳田が飯野川で呼んだ按摩が「おかみん」の父親（亭主としたのは鏡花の誤り。柳田の文章では父親）であったという挿話は、「豆手帳から」（「東京朝日新聞」大正9・8・15～31、9・14～22、のち『雪国の春』昭和3・2、岡書院、収録）に見える。なお、この挿話は「神鷺之巻」（「改造」昭和8・1）の、旅先で出会った猟師が巫女（いちこ）の亭主であったという設定と類似しており、同作に活かされたと考えられる。

以上の文章からは、鏡花と柳田との親密な間柄が窺える。なお、二人は昭和期に二度の座談会「泉鏡花座談会」（「文芸春秋」昭和2・8）、「幽霊と怪談の座談会」（「主婦之友」昭和3・8）で同席している。藤澤秀幸氏が指摘するように（二八）、鏡花は「泉鏡花座談会」で柳田の『山島民譚集（一）』（大正3・7、甲寅叢書刊行所）について直接本人に質問しており、日常的な交友の中でも、こうした遣り取りが行われていたことは容易に推測し得る。大正期においても、鏡花が柳田の著作だけではなく、直接柳田との会話を通して民俗学的な知識を受容した可能性があることは、第二章および第三章で指摘してきた。だが、昭和期では大正期以上に、柳田との交友関係が鏡花の民俗学受容のあり方に大きく影響を及ぼしている。

例えば、山田有策氏が明らかにしたように（二九）、「貝の穴に河童の居る事」は昭和五年四月十三日に渋沢敬三邸で行われた花祭公演を見物した体験を反映している。吉田昌志氏が提示した資料に拠れば（三〇）、鏡花と柳田は当日の芳名録に隣あって署名しており、柳田との縁故によって鏡花がこの公演に招待されたと考えて間違いない。

また、「山海評判記」が柳田の「オシラ神（巫女考の五）」（「郷土研究」大正2・7）、「オシラ神の話」（「文芸春秋」昭和3・9、のち『大白神考』昭和26・9、実業之友社、収録）、「人形とオシラ神」（「民俗芸術」昭和4・4、同上）に依拠した作品であることは、諸家の説く通りであるが[二二]、柳田の影響はこれらの論考にとどまらない。

「山海評判記」が発表された昭和四年は、民俗学の領域でオシラ神への注目が集まった時期であった。柳田の「オシラ神の話」が発端となって、柳田と歴史学者・喜田貞吉との間でその起源をめぐる論争が巻き起こり、これに関連して、金田一京助、田村浩、佐々木喜善ら多くの論者がオシラ神に関する論考や報告を次々と発表した。柳田周辺におけるこうしたオシラ神への関心の高まりが、「山海評判記」成立の背景にあることは疑いない。

特にオシラ神について鏡花との関わりで注目すべきは、昭和三年に柳田邸で行われたオシラ祭である。柳田は大正十五年十一月に青森市の小笠原家よりオシラ神を勧請し、昭和三年三月十八日には八戸のカカサマ（イタコ）を招いてオシラ祭を行った。中河与一「予言　鏡花先生追記」（「文芸世紀」昭和14・10）に拠れば、鏡花はこのオシラ祭に招待されていたが、開催日を一年間違え、昭和四年三月十八日に柳田邸を訪問したという[二三]。この催しに参加した小寺融吉は、「巫女の精神の統一のため、列席者の数は最小限」（「人形と人形つかひ」、「民俗芸術」昭和4・4）にしたと述べており、出席できなかったとはいえ、鏡花が「最小限」の招待客に含まれていたことは留意すべきである。オシラ神についての予備知識を全く持たない者が招待されるとは考えにくく、昭和三年三月には既に柳田と鏡花の間でオシラ神が話題に上っていたと推測できる。

さらに、これ以後も、鏡花は柳田から直接オシラ神について知識を得ていたと考えられる。「山海評判記」には当時の文献に記載のない衣桁型のオシラ神が描かれているが、これは中西由紀子氏が指摘するように[二四]、作中に「西洋人」とのみ記されているニコライ・ネフスキーが発見したものであった。鏡花がこの情報をネフスキーと交際のあった柳田から得たと解するのが妥当であろう。

また、同作「紫の桑」の章で、主人公・矢野はオシラ神の本地は白山権現であると主張し、その理由として北陸と奥州との海上交通が頻繁であったことを挙げる。作中では、北陸から津軽藩に輸入された物品の記録がその証左として紹介されるが、これは中道等『津軽旧事談』（大正14・12、炉辺叢書、郷土研究社）「みかん風」の章に『津軽旧記』からの抄録として掲げられたものと一致する。同書の筆者・中道等は八戸出身の民俗学者で、柳田邸にオシラ神を勧

請する際に周旋の労をとった人物である。なお、炉辺叢書は柳田が発起人となって全国各地の伝説を収録した叢書であり、そのうち、早川孝太郎『能美郡民謡集』（大正13・11、郷土研究社）からの摂取が「河伯令嬢」（「婦人倶楽部」昭和2・4、5）に看取できることは、以前拙稿で指摘した[一四]。

このように、昭和期における鏡花の民俗学への関心は、柳田の著作以外へも向けられている。鏡花の柳田宛書簡下書に「あの日帰り早々続南方随筆あひもとめ申候」（大正15頃、『鏡花全集』別巻収録・書簡下書35）とあるように、鏡花は柳田を通じて南方熊楠の著作にも接していた。前掲注（二）須田論文が指摘する通り、南方熊楠の著作からの摂取は、「遺稿」（「文芸春秋」昭和14・11）に認められる。同作では、

学問、といつては些と堅過ぎよう、勉強はすべきもの、本は読むべきもので、後日、紀州に棲まるゝ著名の碩学、南方熊楠氏の随筆を見ると、其の龍燈に就て、と云ふ一章の中に、（下略）

として、南方熊楠「龍燈に就て」（「郷土研究」大正4・9～11、のち『南方随筆』大正15・2、坂本書店、収録）が引用されている。傍線部の記述から、鏡花は『南方随筆』を参照したものと推定できる。また、「燈明之巻」（「文芸春秋」昭和8・1）に見える「私の隣の松さんは、熊野へ参ると、髪結うて、／熊野の道で日が暮れて、あと見りや怖しい、先見りやこはい（下略）」という「紀州の毬唄」も、南方熊楠「紀州俗伝」（「郷土研究」大正2・4、のち『南方随筆』収録）に拠っている。

なお、民俗学関連の書籍ではないが、『霊怪談淵』（大正15・9、「幽冥界研究資料」第二巻、天行居）についても、柳田は「泉鏡花君と共に頻りにこれを愛読した」（「東京朝日新聞」昭和2・5・13、のち『退読書歴』昭和24・4、実業之友社、収録）と述べている。同書は、柳田と交際のあった神秘思想家・岡田建文が著した神霊・怪奇現象の事例集であり、柳田から鏡花への知識提供が、従来考えられていた以上に、広がりを持っていたことが分かる。

以上見てきたように、昭和期の鏡花は、構想・資料の両面において柳田から甚大な影響を受けていた。特に「山海評判記」は、当時の柳田の研究を色濃く反映しており、柳田との親交なくしては、成立し得なかったと言えよう。

しかし、一方において、柳田との密接な関係の中で成立したことが、同作に対する「鏡花独自の奔放とも言える想像力が柳田の学問的体系にからめ取られて自在さを欠いた」[二五]という評価に繋がったことも否定できない。民俗学受容にも功罪両面があったことを付言しておきたい。

おわりに

本稿では、明治三十年頃の出会いから昭和十四年の鏡花の死まで、およそ四十年にわたる柳田国男との交友を通して、鏡花が民俗学に関心を寄せ、自身の文学に反映させた道筋を辿ってきた。

柳田の他にも、里見弴、水上瀧太郎、久保田万太郎、笹川臨風ら、鏡花と親しい交友関係にあった文学者は少なくない。彼らと鏡花との交渉については書簡等の資料によって明らかにされているが、鏡花文学への影響となると、ほとんど確認できないのが現状である。柳田が「あのと指して型に採つた、時代と云ふものがなかつた」「時代を超脱して居た」（「這箇鏡花観」）と評した如く、鏡花は同時代の思潮とは没交渉に近い作家であったと見なされている。しかし、その鏡花にあって、柳田は影響を与えた数少ない同時代人の一人であった。本稿では、柳田民俗学受容の検証を通じ、鏡花と同時代思潮との一つの接点を提示することができたと考える。

〈注〉

（一）柳田「北国紀行」（明治四十二年、北陸旅行の日記）のちに『北国紀行』（昭和23・11、実業之日本社）に収録された。「怪談の研究」（「中学世界」明治43・3）にも「同じ日本にしても、此の神隠しの非常に多い地方と少い地方とがある。金沢などは不思議に多い地方で、私は泉鏡花君の出たなどは偶然ではないと思つてゐる。」とある。

（二）須田千里「鏡花文学における前近代的素材（下）」（「国語国文」平成2・5）

（三）小林輝冶「鏡花における「民譚」の位相」（「金沢大学語文・文学研究」昭和52・3）

（四）吉田昌志「鏡花ゆかりの人々」（「泉鏡花研究会会報」平成9・5）参照

（五）前掲柳田『故郷七十年』参照

（六）「泉鏡花座談会」（「文芸春秋」昭和2・8）における柳田と鏡花の会話から、「少紳士」が柳田であると分かる。

（七）例えば「読者より見たる自然派小説」（「文章世界」明治41・4）には「又一つ面白くないと思ふ事は、自然派といふと専ら肉慾を描かねばならぬやうに言ふことである。尤も同じく自然主義だといふ人々の中にもいろ〳〵あらうが、兎も角も肉慾ばかりを描かうといふ様なのは悪い趣味だと思ふ。」とあり、「新旧両時代の文芸」（「無名通信」明治42・10）にも「自然主義もいゝだらうけれども、素人写真の習ひたてに友人や兄弟ばかりを写してゐては仕方がない。」

とある。

（八）東雅夫『百物語の百怪』（平成13・7、角川書店）

（九）田中貴子『鏡花と怪異』（平成18・5、平凡社）

（一〇）笠原伸夫『評伝泉鏡花』（平成7・1、白地社）

（一一）田中励儀「「峰茶屋心中」の成立過程――泉鏡花と神戸」（『泉鏡花文学の成立』平成9・11、双文社出版）

（一二）笠原伸夫「鏡花世界、あるいはエロスの繭」（『泉鏡花エロスの繭』昭和63・10、国文社）

（一三）田中励儀「「黒髪」「龍胆と撫子」の成立過程――編修資料の調査をとおして――」（「文学」平成16・7）

（一四）この時期の作品では、その他にも、須田千里「解説」（『新編泉鏡花集』第八巻、平成16・1、岩波書店）が「唄立山心中一曲」（「改造」大正9・12）における柳田の影響を指摘している。

（一五）森田健治「〈物語〉の複数性――「龍胆と撫子」と「山海評判記」」（『論集昭和期の泉鏡花』平成14・5、おうふう）

（一六）工藤三壽男「『帰国』及びその周辺をめぐる一考察」（「田山花袋記念文学館研究紀要」平成16・3）参照

（一七）礫川全次『サンカと説教強盗』増補版（平成6・12、批評社）掲載の翻刻を参照した。

（一八）藤澤秀幸「柳田国男と泉鏡花」（「解釈と鑑賞」平成3・12）

（一九）山田有策「貝と河童と花祭り」（「国語と国文学」平成9・3）

（二〇）吉田昌志「解説」（『新編泉鏡花集』第四巻、平成16・8、岩波書店）

（二一）小林輝冶「「山海評判記」成立の背景――フォークロアの美学――」（「国語国文学」昭和54・2）、野口武彦「魂の水中回廊――泉鏡花の『山海評判記』」（「海燕」昭和60・10）他

（二二）吉田昌志「年譜」（『新編泉鏡花集』別巻二、平成18・1、岩波書店）昭和四年三月十八日の項参照

（二三）中西由紀子「「山海評判記」を読むために――フォークロアの改訂再考――」（「近代文学論集」平成15・11）

（二四）拙稿「泉鏡花「河伯令嬢」論」（「国語国文」平成15・8）

（二五）山田有策「柳田国男と近代文学――泉鏡花をめぐって――」（「解釈と鑑賞」平成3・12）

付記　鏡花作品の引用は『鏡花全集』（昭和61・9～平成1・1、岩波書店）に、柳田国男の著作の引用は『柳田国男全集』（平成9・10～18・5、筑摩書房）に拠る。引用に際し、旧字を新字に改め、ルビは適宜省略した。

（あべ　あゆみ・本学文学研究科聴講生）